慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	歐州近世史, 阿部秀助譯
Sub Title	
Author	恒松, 安夫(Tsunematsu Yasuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.1 (1924. 6) ,p.158(754)- 160(756)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240600-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

べ即近的現代的意味の社會を指さるゝが如きも是れ又あまりに狹くして前述の第三義に相當するものと見るを得ん。

「德川時代封建の得失」……博士は瀧本博士が封建制度の經濟上の發達を阻害せるを主張せられしに反し、封建制度の光明をも認むべしとせらる。然しながら博士は寧ろ光明面に捉はれし嫌あるが如し。曰く「封建制度のために國民をして安んじてその生を送り産業に從事するを得しめ、且その間に充分なる準備を整へ、潛勢力を養ひ得たればこそ、明治になりて長足の進歩をなせり」と

博士も云はるゝが如く、封建制度は動亂の後を享けて社會の基礎を安固ならしめんとする自然の必要に基つきて發生せるものなれば、社會發達の或る時期に於ては經過せざるべからざる必然的階段なり。然らば封建制度の暗黑を見て恩人の賞揚するも、共に無用の言なるで。

博士の所論の明快なることは前述の如くなるが、他方に於てはあまりに簡單に片附けられし嫌なきにしもあらず。例へば本書一二〇頁に「前述の延曆五年八月の格は良賤間の婚姻を是認したに過ぎぬやうであるけれども、之によつて踰ゆべからざる兩階級間の區別が撤廢されたもので、一般奴隷を解放する一の形を示せるものと見て差支ない」とあり、結婚の不認可が階級差別の一現象たることは承知し居れど、その認可が直ちに階級差別の撤廢を意味すべきか。又二五八頁に「明治の社會階級としては、華族士族平民の三者を數ふべきものであるが、それは形式的のものであつて、實際に於ては四民平等である」とあれど、果して形式的の差別とのみいひ得べきか。第一明治四十餘年間の變化は實に千萬無量なれば、一概に明治時代は云々なりといふは、實に危險千萬なりと思惟するなり。第二近時の難問題として小作運動と肩を比ぶる水平運動を見ても、一篇の法令は中々に根底深き階級差別を撤廢する能はざるを知るなり。

（幸田、小川）

歐州近世史

阿部秀助譯　國民圖書會社

レオポルド・フオン・ランケは一八二二年處女作「ラテン・チユートン民族史」を著はして一躍史苑の一大革命を惹起し、彼の學殖は斯界に認めらるゝに至り、遂に助敎授としてベルリン大學より招聘せらるるに至つた。本書今や阿部敎授の手によりて邦譯せられ「歐州近世史」と改題して廣く我國に紹介せらるゝ好機會を得たるは吾人の欣懽に堪えざる所である。

ランケの史風に就き譯者は其序文に述べて曰く「彼は其頃（フランクフルトに在住時代）より世界史的意義の輕視すべきでないことを確信し、益々歷史に親しみ、ギリシア、ローマの有名な史

家の作は殆ど是を讀破しないものなく、進んで民族遷徙及び中世時代の史料を研究した。彼は十八世紀に見るが如き空想の兒ではなくて、其觀察する處は、常に實際に現れた事實そのものであつた。換言すれば歴史的眞理にあつた。而して彼は是が普偏的意義を見出すに常に特殊な事實の核子を以つてした。斯くて彼は考證家として、又歴史の教授に於て、常に此見地を離れ」なかつたと然り彼が歴史的事實の中に眞理を探求せし態度は 神 に對する宗教家の敬虔と熱情とを具へてゐた。彼は所謂考證學派の始祖ではあるが然も彼の歴史に考證偏重の弊を些も認め得ないのは彼に明敏犀利なる考證的才能と共に大局を達觀し複雑なる事實を綜合し統一する特殊の才能が具つてゐたがためである。

本書は一四九四年より一五一四年に至る二十年間に於けるフヲ●チユートン兩民族の關係を述べたるものである。伊太利に於て文藝復興運動の搖籃となりしものは都市國家であつて當時の伊太利は古代希臘に於けるが如く發達せる都市國家の集合體であつて一勢力の下に統一せられたる一國家ではなかつた。其故自國に於て國家的統一の事業を成就せし近隣の諸王は次に小勢力の離合集散常なき伊太利に征服の手を延べるのが常であつた。斯くて伊太利は一片の肉を奪ひ合ふ處の狼群の爭闘にも相似たる爭を近隣の諸勢力によつて繰り返される地となつた。本書を一編の戯曲と見做すならば、そこにはフランス、イスパニア、ホーストリア、ドイツ等の諸王とローマ法王と伊太利の諸小王との渾然たる一大演劇を展開することが出來る。

今玆に本書の内容を概觀しこれを紹介せんと欲するも其は到底至難の業と云はなければならない。何故ならば本書に於て取扱はれたる期間は極めて短く然もその中に包含せられたる事實は微に入り細に亘り複雑極りなき故である、斯の如く微細にして複雑なる歴史的記述は徒に事實に忠實ならんことを努むる結果往々にして無味乾燥なるものとなり勝であるが本書におりてはかゝる弊害は些も存じない。ランケは複雑なる事實の説明に配するに豊富にして興味津々たる挿話を以てしたるが故に本書は單に一個の價値ある學術書たるに止まずして宛然一個の偉大なる文學的作品としての價値を有す ものと云へる。

第一編はシヤール八世のナポリ遠征より筆を起し主として佛伊の關係を墺伊の關係を述べ第二編は主として西伊の關係を述べたるものである。

本書の譯者阿部教授は常にランケの史風に私淑せられランケの著書の熱心なる愛讀者である。本書が譯者として教授を得たるはまことに其の人を得たるものといふべきである。譯文亦流麗にして原著者の文意を遺憾なく傳へられたる點はた〳〵敬服の他なき次第である。終りに臨み譯書の序文の結末にランケ著阿部秀助譯とあるは印刷の誤と覺しく此等の文字は一七頁の標題の下位に

行くべきものなることを附言し置く。（恒松安夫）

國民の日本史　飛鳥奈良時代

西村眞次著　早稻田大學出版部發行

飛鳥奈良時代は、日本歷史に於いて最も重要なる時代の一つである。即ち政治的に言つて日本が始めて對内的にも對外的にも強烈なる國家的意識に覺醒し、強固なる統一と旺盛なる活動とをなした時代であつた。たとひ大陸に於ける根據地を喪失したとは言へ、對外關係がますく頻繁に、複雜に、全國家的になり行くとともに、國内に於いては地方の開拓の進捗につれて異種族との接觸がさかんになり、同時に從來の國家組織、社會制度の根源であつた氏族制度を破壞して中央集權の確立を期せんとする努力がなされた。また文化的に言つて日本は、さかんに外來文化を輸入同化し、固有文化と融合して新たなる綜合文明を創造したのである社會制度改造の原理となつた法制的知識は、隋、唐にその淵源を發するのである。深遠なる哲理をもつて單純な原始的信仰に一大衝動を與へた佛教は、印度の所産である。いまなほ世界の文化史上に於ける一大驚異とされる當時の藝術――繪畫、彫刻、建築、音樂、舞踊をみよ、遠く支那、印度、ペルシヤ、アツシリヤ、ギリシヤ、エジプトにまでその系統をもとめられ、いくたの世界的要素を包含するのである。要するに當時の日本は、剛健なる政治的體軀をもつて、清新濶溌たる文化的呼吸を旺盛に營んだ時代であつて、封建制度を打破して近代的國家の形式をとり、西洋文明の影響をいちぢるしくうけた明治時代の姿と極めて類似する。從て明治時代の空氣を親しく呼吸した吾々にとつては、この時代は深甚の興味を喚起するとともに、またその時代の複雜であるだけその時代史の構成の極めて困難なるを思はしめる。而してここに紹介する西村氏の「飛鳥奈良時代」は、實にこの複雜なる時代を取扱へるものである。

まづ著者は筆を原始狀態より起して、佛教の起原とその發達、及びこれが日本に輸入された經路を明かにし、聖德太子を中心としてその時代相を叙し、氏族制度の弊竇より大化の改新、並びにその改新の中心人物たる天智天皇を論じ、律令の制定と政府組織の系統化とをのべて社會組織の改造を明かにし、ついで建築、繪畫彫刻、科學等の精神文化の系統をたづね、さうして飛鳥文樣をもつて時代藝術の象徵としてゐる。また奈良時代はその社會相から出發して、平安遷都、文化的行政、民衆生活、社會裏面の黑影を叙し、聖武天皇と光明皇后とを中心として佛教國家の建設を說きついで奈良藝術の内包及び外延を論じて、音樂と舞踊とをもつて當時の藝術の象徵となし、最後に時代末の墮落齣の章に於いて、宮中の腐敗、押勝及び道鏡の專横と野心、財政經濟上の危機等を論じてゐる。